

ノーと言えない受動構造

——日本語, インドネシア語の「ナル型」受動構文——

湯 浅 章 子

Why Japanese People Cannot Say ‘No’:

From the Perspective of Japanese-Indonesian Contrastive Linguistics

YUASA Akiko

Abstract: It has often been said that the Japanese are a people who cannot say ‘No’. Some people think that Japanese people cannot say ‘No’ because that they have lived in a homogeneous society since childhood and have experienced almost no conflicts with people of different cultures. However, this explanation cannot explain why Indonesians, who comprise diverse people with different languages, religions, and ethnicities, prefer euphemisms as much as the Japanese do. What then makes this so? In this paper, we discuss why the Japanese cannot say ‘No’ from the perspective of the contrastive linguistics of Japanese and Indonesian, and reveal that there is a ‘*naru* type’ (spontaneous type) of passive syntax in the background.

Key Words: Euphemism, Spontaneous-type passive syntax, Sapir-Whorf Hypothesis, Contrastive linguistics, Japanese/Indonesian, Japanese who cannot say No

要旨: 日本人は「ノー」と言えない民族だとしばしば言われてきた。日本人が「ノー」と言えないのは、子どもの頃から同質社会に住み、異質な文化を持つ人間とのせめぎ合いをほとんど経験していないからだ、と考える人もいる。しかしこの説明では、言語、宗教、民族が異なる異質社会に暮らすインドネシアの人々が、日本人と同様に婉曲的な表現を好むことについての説明は不可能だ。

本稿では、日本人が「ノー」と言えない理由を、日本語、インドネシア語対照から考察、検証し、その背景に「ナル型」(自然本位型)受動構文の存在があることを明らかにした。

キーワード: 婉曲表現, ナル型受動構文, サピア・ウォーフ仮説, 対照言語学, 日本語/インドネシア語, ノーと言えない日本人

1. はじめに

なぜ日本人は、はっきり「ノー」と言わないのか(言えないのか)と、よく留学生に聞かれる。確かに私たち日本人は、何かを断る際、そのニュアンスのみをふんわり相手に伝え、それで分かってもらおうとする傾向があるように思う。

盛田、石原(1989)は、日本人が「ノー」と言えない背景には、儒教の影響や、子どもの頃から同質社会に住み、異質な文化を持つ人間とのせめぎ合いをほとんど経験していないこと等がある、と述べている¹が、確かに

1 関連文献に、石原、渡部、小川(1990)、石原、江藤(1991)等がある。本稿はこれらの主張自体を議論するものではないので、これらは関連文献として紹介するにとどめる。本稿では、あくまでも言語対照の立場からの考察、検証を行う。

日本では、そういった背景が、はっきり「ノー」と言わなくても以心伝心で伝えることができる文化や慣習に関わっているのかもしれない。しかし、仮にそう考えた場合には、言語、宗教、民族が互いに異なる異質社会に暮らすインドネシア²の人々が、日本人と同様に婉曲的な表現を好むことについては説明がつかない。そこには、どのような原理が横たわっているのだろうか。

本稿では、両言語における「ナル型」受動表現が関与している可能性を考え、対照言語学の立場からのアプローチを試みる。

2. 3 種の受動表現

インドネシア語には、‘di-’, ‘ter-’, ‘ke-an’ という接辞やマーカー³で表わされる 3 種の受動表現⁴がある。それぞれを例に示せば次の通りである。

‘di-’

Taro dipukul oleh Jiro. (太郎が次郎に殴られた)

太郎 殴られる に 次郎

‘ter-’

Menara itu terlihat dari sini. (その塔がここから見える)

塔 その 見える から ここ

‘ke-an’

Ia belum lama ini kematian anak sulungnya. (彼は最近長男 (長子) に死なれた) (DPN, KBBI, 2001)

彼 最近 死なれる 彼の長子

日本語にも様々なタイプの受動表現があるが、日本語では一般的に全てが ‘(r)are’ を用いて表されるのに対し、インドネシア語では ‘di-’, ‘ter-’, ‘ke-an’ という接辞やマーカーが使い分けられている。

本稿ではまず、両言語を対照しながら各種の受動表現の構文と用法を分析し、次にこれらが使い分けられる場面と意味について考えてみたい。

3. 先行研究

インドネシア語の受動表現を日本語の受動表現との関連から言及した先行研究には、インドネシア語の ‘ke-an 受動文’ と日本語の「第三者の受け身」との類似性を示した森村 (1992)、インドネシア語の ‘ter-構文’ における「受け身」と「自発」の連続性を指摘した松岡 (1990)、日本語とインドネシア語の受動表現を「世界と世間」という切り口から分析した湯浅 (2006) 等がある。

また、‘ter-構文’ の研究に関しては、「完了」「自発」「可能」「無作為」の意味の連続性を指摘した Gorys (1980)、Sitinduan (1984) や、森村 (1981, 1996)、佐々木 (1982)、正保 (1985)、松岡 (1995)、バタオネ、近藤 (1990) 等があり、‘di-構文’ の研究については、受動文の類型を示した安田 (1998) 等がある。インドネシア語の様々な受動構文の分析には、佐々木 (1990)、森村 (1996) 等が、インドネシア語の動詞等を「する・なる」で分析した研究には、ルシアナワティ (1998)、湯浅 (2000, 2006)、関 (2004) 等がある⁵。

これらは、本稿と同様の視点から考察した研究ではないが、関連する研究として掲げておく。

2 インドネシアは 300 以上の民族から成る共和国である。総人口の 8 割以上がイスラム教を信仰し、他に、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教、儒教等を国が広く認めている。明確な否定表現よりも婉曲的な表現を好む点で日本人とよく似ている (湯浅 2006)。

3 様々な呼称があるが、本稿では、‘ter-’ ‘ke-an’ を接辞、‘di-’ をマーカーと呼ぶ。

4 他に、ke-受動、語基動詞受動、ゼロ受動等も受動態形式として認める立場もあるが、普遍性や生産性等の観点において疑問が残る。本稿は松岡 (1995) や森村 (1995) の見解に賛同する立場をとり、主要な 3 種に絞って考察する。

5 各研究における「する」「なる」の捉え方はやや異なる。本稿では、寺村 (1976) 池上 (1981) の概念に基づく立場をとる。詳細は湯浅 (2000) を参照されたい。

4. 日本語, インドネシア語の様々な受動表現

日本語の受動文は様々なタイプが‘(r)are’を用いて表されるが、インドネシア語では‘di-’‘ter-’‘ke-an’という接辞やマーカーで使い分けられる。

分類に有意義なのでこれらを利用し、それぞれのタイプごとにインドネシア語と日本語の受動表現を対照させる形で以下に示す。

4.1 ‘di-受動文’ と日本語の「直接受け身」

‘di-受動文’は能動-受動対立を持つ受動表現⁶である。日本語の「直接受け身」に対応する受動表現とみてよくだらう。以下にインドネシア語の‘di-受動文’と日本語の「直接受け身」とを対照させて示してみる。

- | | |
|---|--|
| (1) Koji <u>dimarahi</u> (oleh) guru. | ← Guru memarahi Koji. |
| 浩二 しかられる によって 先生 | 先生 しかる 浩二 |
| (1’) 浩二が先生にしかられた。 | ← 先生が浩二をしかった。 |
| (2) Pada tahun 1511 Malaka <u>diserbu</u> (oleh) bangsa Portugis. | (森村, 1988) |
| に 1511年 マラッカ 攻撃される によって 民族 ポルトガル | |
| | ← Pada tahun 1511 bangsa Portugis menyerbu Malaka. |
| | に 1511年 民族 ポルトガル 攻撃する マラッカ |
| (2’) 1511年にマラッカはポルトガル民族に攻撃された。 | |
| | ← 1511年にポルトガル民族がマラッカを攻撃した。 |

このタイプの受動文は、対応関係にある能動文を持ち、基本的に受動文は対応する能動文と同じ事象を表わしている。動作主の行為は意図的であり、受動文の主語はその動詞の表わす動きから直接的な影響⁷や働きを被っている。いわば、このタイプは動作主の意図が存在する「行為型 (スル型)」⁸の表現である。事象を動作主側から見ているのか (能動態)、それとも被動作主側から見ているのか (受動態) の違いにより能動/受動の違いはあるものの、基本的に表わされている事象は同様⁹であって、いわゆる「態」であると言える¹⁰。このタイプの受動文では、行為を行う動作主が (たとえ文中に表れていなくとも) 必ず存在する。

4.2 ‘ter-受動文’ と日本語の「自発的受け身」

インドネシア語には‘ter-’を用いた受動表現がある。

松岡 (1990) は「要するに ter-他動詞文は受動態または自発態である」と述べ、この構文における受け身と自発の連続を指摘している。また、Gorys (1980) や Sitindan (1984) は、「ter-には telah selesai dilakukan (受動完了), spontanitas (自発), kesanggupan (可能), tidak sengaja (無作為) 等の意味がある」(日本語訳は筆者-以降同様) と指摘し、これらの連続性を示唆している。

受動/自発/可能が連続する‘ter-受動文’の様々なタイプを、Gorys や Sitindan らが示す4タイプをベースに、森村の先行研究も踏まえながら以下に示す。

6 インドネシア語では能動-受動対立を有する場合は例文 (1)~(3) にみられるように動詞は一般的に‘me-’と‘di-’の形態的な対立を持つ。詳細は湯浅 (2002) を参照されたい。

7 ここでいう影響とは、基本的には Hopper & Thompson (1980) が示す“affectedness”に基づき、さらに細かく言えば林 (1993) が示す“受影性”の概念に近い。

8 スル/ナル、行為/成りゆき、意図/非意図等に関するインドネシア語関係の研究については、佐々木 (1982)、松岡 (1990)、森村 (1996)、ルシアナワティ (1998)、湯浅 (2000, 2002, 2004, 2006) 等がある。

9 大塚 (1959) 参照。

10 態 (Voice) という概念をどのように定義すべきかについては様々な立場があり、各言語 (例えば英語と日本語) においてかなり異なる概念規定がなされている。特に日本語の場合は自動詞であっても受動文が形成できる「第三者の受け身」等を含む様々な受動表現全体を広い意味での‘Passive Voice’¹⁰と捉える立場 (柴谷 1982 等) もある。ここで言う「いわゆる態」とは、英語等において一般的に定義されてきた「態」を指す。

A. 受動完了 (telah selesai dilakukan)

- (3) Bahasa Melayu dipakai sebagai bahasa pengantar, sehingga tersebar luas. (森村, 1988)
 ムラユ語 使われる として コミュニケーション語 その結果 広まった 広く
 (ムラユ語がコミュニケーション語として使用された結果, 広く広まった)

B. 自発 (spontanitas)

- (4) Kenji terpesona pada kecantikan wanita itu.
 健次 魅了される に 美しさ 女性 その (健次はその女性の美しさに魅せられた)

C. 受動的可能, 自発的可能 (kesanggupan)

- (5) Rumah Yanto terlihat dari bukit ini.
 家 ヤント 見える から 丘 この
 (ヤントの家がこの丘から見える)

D. 非意図的受動 (tidak sengaja)

- (6) Kaki anak itu terinjak oleh saya. (森村, 1996)
 足 子供 その うっかり踏まれた に 私
 (その子供の足は私にうっかり踏まれた)
 (意識: その子供の足を私はうっかり踏んでしまった)

これらは次のようにまとめることができる。

A. 受動完了 (telah selesai dilakukan) - 例文 (3)

「ムラユ語が (意図的に広められたのではなく) コミュニケーション語として使われたため, 結果的に広まった」

B. 自発 (spontanitas) - 例文 (4)

「(その女性が意図的に魅了しようとしたわけではないのに) 健次がひとりで魅せられた」

C. 受動的可能, 自発的可能 (kesanggupan) - 例文 (5)

「(意図的に見ようとしなくても) その場からヤントの家が見える」

D. 非意図的受動 (tidak sengaja) - 例文 (6)

「意図的に踏んだのではなく出ていた足をうっかり踏んでしまった」¹¹

A.~D. に共通して言えることは〈非意図性〉の構図である。いずれも意図的に行為を行った動作主はおらず, それ故, 対応する能動文はない。いずれも誰かが故意にそうしようとしたわけではないのに自然にそうなった, という成りゆきのな「ナル型」タイプ¹²であり, D. タイプ (このタイプは日本語にはない) を除けば, 日本語の自発表現に相当する。

これらのタイプは, 動作 (行為だけでなく, 見る, 聞く, 心の動き等を含む広い意味での動きを指す) をした者には, そうしようとする意図はないのに起こり得た自然成りゆきのな「ナル型」事象である。

さらに, C. 「受動的可能, 自発的可能 - 例文 (5) に関しては, 法助動詞を伴わず法的意味 (〜し得る) が付随する点を考慮に入れば, 「受動態」というよりも, むしろ英語等に見られる 'Middle 構文' に類似する¹³ 構文とも考えられる。比較のため, 法助動詞 (bisa = 英語の can に相当するもの) を含まなければ可能の意味を表現できない 'di-受動文' 範疇の可能表現 (意図的可能表現) を例文 (7) に挙げ, (5) との違いを見てみよう¹⁴。

11 D. のタイプは日本語にはないため, 意識で意味を示した。

12 注 5 参照。

13 Middle 構文 (中間構文) とは能動態でありながら受動態の意味を併せ持つ文のことで, 例えば, *This computer sells well.* (このコンピュータはよく売れる) 等である。C. - 例文 (5) は, これらとは若干タイプが異なるものの類似している。さらに A. B. D. も様々な点で C. との連続性があり, C. のタイプよりは遠いものの Middle 構文との連続性が考えられる。これらに関する詳細は湯浅 (2002) を参照されたい。

14 インドネシア語では「意図的可能表現」の場合は法助動詞 (bisa, または dapat, = 英語の can に相当するもの) を含まなければ可能の意味を表現できない (例文 (7))。この点が C. - 例文 (5) で示したナル型の「受動的可能表現 / 自発的可能表現」とは異なる。更なる詳細は湯浅 (2002) を参照されたい。

(7) Masalah ini bisa diatasi oleh Fumio ?

問題 この できる 越える に 文雄

(文雄に この局面が乗り越えられるか)

例文 (7) の場合は、動作主 (文雄) に意図がなければ事象は成立しない。この点において 'di-構文' 範疇の「意図的可能」表現と例文 (5) のような非意図的タイプの「受動的可能、自発的可能」表現 ('Middle 構文' に近い可能表現) とは「意図」という側面において大きく異なることがわかる。

4.3 'ke-an 受動文' と日本語の「第三者の受け身 (迷惑受け身)」

インドネシア語には共接辞 'ke-an' を用いた以下のような受動表現がある。

(8) Saya kehujanan.

私 雨に降られる

(私は雨に降られた)

← Hujan.

雨が降る

(雨が降った)

(9) Ia kematian anak sulungnya.

彼 死なれる 彼の長子

(彼は長男 (長子) に死なれた)

← anak sulungnya mati.

彼の長子 死ぬ

(彼の長男 (長子) が死んだ)

(10) Saya kedatangan tamu tadi malam.

私 来られる 客 昨夜

(私は昨夜客に来られた)

← Tamu datang tadi malam.

客 来る 昨夜

(昨夜客が来た)

この 'ke-an 受動文' は様々な点において日本語の「第三者の受け身 (いわゆる迷惑受け身)」に類似している。

日本語の「第三者の受け身」とは、日本文法事典 (1981 北原他編) によれば「能動態の文に含まれていない (含みようのない) 第三者が受動化によって主語の位置に立つことになったもの (仁田 1981)」とされる。両言語を対照させながら類似点を見てみよう。

これらのタイプの受動文 (日本語の「第三者の受け身」及びインドネシア語の 'ke-an 受動文') は、能動文を構成している共演成分の数に比べ、全く別の (能動文に含み得ない) 構成要素の数を 1 つ増やしている。それ故、4.1 で示した 'di-受動文' / 「直接受け身」に見られるような対応関係にある能動文を持ち得ない。また、これらのタイプは、森村 (1992) が指摘するように、ある独立した事象 (例えば「雨が降る」) が起こり、その事象の生起とは別個に存在する第三者 (例えば「私」) がそれによって間接的に利害 (多くの場合は被害) を受ける、という意味構造上の特徴を持つ点も共通している。自動詞 (上述の例文で言えば「雨が降る、死ぬ、来る / ujan, mati, datang」) であっても受動文が形成できる点も共通である。

松岡 (1990) は、インドネシア語の 'ke-an 受動文' を『主体の外 (外界) で何かがその自動詞の表す行為をして、それが心理的、物理的に主体に影響してくることを言い表すもの』と述べているが、これは日本語の「第三者の受け身」にも当てはまる。

即ちこの構文では、主体 (受動文の主語 - 以下同様) の外での何かの動きや状態 (第一事象) が、結果として主体に影響を及ぼす (第二事象) という二重構造であり、その動きや状態は主体に対して故意に向けられたものではない。動詞が表す動きをしたものには、主体に対する意図は存在しないにも拘らず、結果的に主体に影響を与えてしまうという「ナル型」の受動構造となっている。

5. 日本語、インドネシア語の受動文における「スル型 / ナル型」の共存

4 節で見たように、日本語、インドネシア語には様々な受動表現がある。このうち、4.1 で見た 'di-受動文' / 「直接受け身」のような「スル型 (意図型、行為型)」タイプは、英語をはじめ、多くの言語で一般的に見られる能動 - 受動対立を持つ受動表現である。

一方、4.2 で見た 'ter-受動文' / 「自発的受け身」や、4.3 で見た 'ke-an 受動文' / 「第三者の受け身 (迷惑受け

身)」などの「ナル型 (非意図型, 成りゆき型)」タイプは, 他の言語には一般的な受動表現として定着しているものではない。特に, 4.3 で見た 'ke-an 受動文' / 「第三者の受け身 (迷惑受け身)」は他の言語に見られることは稀であり, 寺村 (1982) はこのタイプを「(ハタ) 迷惑受け身として日本語を学習する外国人なら誰でも知っている “奇妙な” 受け身である」と述べている¹⁵。日本語やインドネシア語には, 他の言語に一般的に見られる「スル型」タイプの受動表現だけでなく, 他言語にあまり見られない「ナル型」タイプの受動表現が共存しているのである。

6. ニュートラルな「スル型」と結果含意の「ナル型」

日本語とインドネシア語における「スル型」「ナル型」の受動表現をみてきたが, そもそも能動-受動対立を持たない「ナル型」の受動表現を「受け身」と捉えてよいのかという問題が残る。本稿では, 両言語に見られる「ナル型」受動表現も「受け身」と捉えて包括的に考察すべきであり, むしろ「スル型」よりも「ナル型」の方がコアである可能性さえある, と考える立場を取る。以下にその理由を示す。

日本語の受け身の根源は「自分が関与しないのに, ある動きによってひとりでにその状況に置かれる」という「自発」表現だとする説がある¹⁶。この説に着目し湯浅 (2000) で検証したところ, 「結果 (相) 含意」という観点から見た場合には, 日本語・インドネシア語の受動表現においては, むしろ「ナル型」の方が「スル型」よりもプロト性 (プロトタイプの性質-以下同様) は高いという結論に達した。根拠は命令文の存在である。

日本語やインドネシア語の「直接受け身」及び di-受動文 (スル型) には, 次にみられるような命令文¹⁷が可能な場合がある。

(11) お前が悪いのだから, 一発次郎に殴られろ。

(12) 先生にしっかり叱られなさい, ヒロキ君。

(仁田 1995)

(13) Jangan mau dipukul! (殴られようとするな)

(14) Pintu itu tolong dibuka!

(森村 1981 改変)

(そのドアは開けられて下さい) (意識: そのドアを開けて下さい)

命令文とは, テンズ的に言えば発話時よりも後の事象 (未来事象) に関して言及する文であり, またアスペクト的に言えば, 未だ起こり得ていない相 (未然相) から始動相に移る部分に関して働きかける文である。命令文作成が可能な「直接受け身」や 'di-受動文' は即ち, 未来事象や起動相に関する言及が可能な構文, ということになる。つまり, これらの構文 ('直接受け身' や 'di-受動文') は, もともと構文自体が結果 (相) を含意するものではなく, アスペクト的にはむしろニュートラルな構文だと言える。

英語の受動表現に 'be 動詞' が付加される現象などから, 受動文の機能の一つに「行為」から「変化した状態」に変える機能がある, と言われてきた。そしてこの「変化した状態」には『結果』という概念が含意される。それゆえに, 英語の受動表現を, 未然相から始動相に移る部分に働きかける「命令文」に変えることはできない。

だとすれば, まだ起こっていない (未然の) 事柄を相手に求める「命令文」の作成が可能な日本語の「直接受け身」/インドネシア語の 'di-受動文' は, 必ずしもその構文自体に結果が含意されているとは言えず, この観点

15 寺村 (1982) はこの構文に関して次のように述べている。「英語の受動構文は能動文の目的語主語に転ずることによってできるものだが, 日本語には同様のもの (直接受け身) の他に, ある事象 (父ガ死ヌ, 何者カガ父ヲ誘惑スル) が, 傍らのものに難儀をもたらすことを表す受け身表現がある。「父ニ死ナレル」「何者カニ父ヲ誘拐サレタ」のような言い方で「(ハタ) 迷惑受け身」として日本語を学習する外国人なら誰でも知っている奇妙な受け身である」

16 竹内 (1977) は次のように述べている。「…受け身といっても, 日本語の場合は, 他からの動作を受けるという意識よりも, 自分が関与しないのにある動作によって自分がある状態に置かれるという意識のほうが強いのである。いずれにしても, 自動詞を作る接尾辞「ゆ」から自発形式が成立し, それから一方には受け身形式が, 他方に可能形式が派生したと見るのが妥当であると思う」。橋本 (1969), 吉田 (1971), 土屋 (1974) も「れる, られる」の根本的意味は自発であり, そこから受け身, 可能等の意が派生したとする。「ナル型」受動表現を「受け身」と捉えて考察しなければ, これらを包括的に説明することはできない。

17 di-受け身の命令文については森村 (1981) 等にも指摘がある。

から見れば受動文としてのプロト性は落ちる。一方で、日本語、インドネシア語の「ナル型」受動文は、命令文に変えることは不可能である。以下を見られたい。

- (15) *きみ、子どもに死なれなさい。
 (16) *その女性に魅せられなさい、健次君。
 (15') *Tolong kematian anakmu.
 (16') *Tolong Kenji terpesona pada kecantikan wanita itu.

結果としてそうなるという構造の「ナル型」受動構文は、その構文自体が「結果」を含意しているため、未来事象や起動相に働きかける命令文の作成は不可能なのである。松岡（1990）は、‘ter-’が主として「完了相」であるのに対し‘di-’はそれ自体で「時制」や「相」までを表示する能力がないことを指摘している。この指摘は、この2タイプ（ter-と di-）の特徴を端的に言い当てている。

もともとその構文自体が「結果」を含意する「ナル型」受動構文と、その構文自体が必ずしも「結果」を含意しているとは言えない「スル型」受動構文を比較した時、日本語とインドネシア語における「ナル型」受動表現は、むしろ「スル型」受動表現よりもプロト性は高いと言える。

日本語、インドネシア語の受動表現には、能動-受動対立を持たない「ナル型」タイプの受動表現が生産的に存在している。そして、これらがマージナルな受動表現であるという積極的根拠は見当たらない上に¹⁸「結果の含意」という観点から見れば、むしろ「スル型」よりもプロト性は高く、これらが、日本語、インドネシア語における受動表現のコアを成している可能性が考えられるのである。

7. 日本語、インドネシア語の「ナル型」受動表現

ここで、竹内（1977）の見解をもう一度引こう。

「…受け身といっても、日本語の場合は、他からの動作を受けるという意識よりも、自分が関与しないのにある動作によって自分がある状態におかれるという意識のほうが強いのである。」（竹内 1977）

この見解は、池上（1981）が指摘する日本語の「ナル型」傾向と繋がるものがある。影山（1998）は、この「ナル型」を「状況重視型」と言い換えて「スル型」の「人間重視型」と区分し、池上が引用した佐久間（1941：『日本語の本質』）の観察を次のように引いている。

「日本語ではとにかく物事が「おのずから然る」ように表現しようとする傾きを示すのに対して、英語などでは「何者かがしかする」ように、さらには「何者かにさうさせられる」かのように表現しようとする傾向を見せている…。ヨーロッパ風の表現における…特色を、かりに人間本位的といふならば、日本語におけるものは、むしろ自然本位的、あるひは非人間的ともいへる…」

日本語の受け身の源がどのような形であり、どのような変遷を辿ってきたかについては本稿では言及しないが、確かなことは、日本語とインドネシア語においては「スル型」と「ナル型」の受動表現が共存しており、「結果の含意」という観点から見れば、「スル型」受動表現よりも「ナル型」受動表現の方がプロト性が高く、両言語の受動表現のコアを成している可能性があるということである。

そして、この〈非意図性〉の構図を持つ「ナル型」受動表現は、上述した竹内の見解や佐久間の観察が示すように「自然本位的」であり「何者かにさうさせられた」のではなく「おのずから然る」という受動認識がベースにある。

日本人は「ノー」と言えない民族であることがしばしば取り沙汰されてきた。盛田、石原（1989：再掲）は、

18 これらの受動表現がマージナルな受動表現であるという積極的根拠は見当たらない。紙面の関係でここでは詳述を避けるが、この詳細については湯浅（2000, 2002）を参照されたい。

日本人が「ノー」と言えない背景には儒教の影響や、子どもの頃から同質社会に住み、異質な文化を持つ人間とのせめぎ合いをほとんど経験していないことなどがあると述べており、確かにそういった要因も考えられるが、この説明をもっては、同様に婉曲的な表現を好むインドネシア民族¹⁹に関する説明は不可能だ。

日本語やインドネシア語に現存する「ナル型」受動構文の存在が、ひとつの答えとなるだろう。

何らかの行為を受けたという「人間本位的」なスル型受動認識を持つ場合には「ノー」といい得るが、ひとりでにその状況となったり、故意に向けられた動きではないのに結果的に影響が及んで来るという「自然本位的」な「ナル型」受動認識を持つ場合には「ノー」とは言い難い。意図的に行為を行った動作主がないのだから「ノー」と言う対象がないし、成り行きに向かって「ノー」と言っても全く無意味だからである。

つまり我々は、受動事象を自然本位的に受け止め、「ノー」と言わないのである。こう考えれば、日本人やインドネシア人が明確な否定表現を避け、婉曲的な表現を好む傾向にあることをうまく説明することができる。

8. まとめにかえて—言語と思考

日本人は、好きでたまらない相手を落として結婚に漕ぎ着けた場合でも「この度、結婚することになりました」のように「ナル型」表現を好んで使う。自分の意に反して会社をクビにされた場合にも、「会社をクビにされました」でなく「会社をクビになりました」「会社を辞めることになりました」のように「ナル型」表現を用いる傾向にある。直接受け身の構文を使うことはむしろ限定的であり、これは我々が様々な事象を「人間本位的」でなく「自然本位的」に受け止めていることを物語っている。そしてこの受け止めは、一方では調和や思いやりを生む婉曲やポライトネス²⁰へと、また一方では明確な拒否を嫌う曖昧で無責任な言語傾向へと結びついている。

サピア・ウォーフは、言語が人間の認識や思考を規定、あるいは影響を与える、という仮説を立てた²¹。このことを論証することは容易ではないが、言語が文化の特徴をよく反映し、相互に影響を与え合っていることは周知のことである。

日本語・インドネシア語に現存する「ナル型」受動表現には、我々の認識や思考がよく映し出されており、また逆に、この表現が我々の認識や思考に影響を与えていると考えられる。日本人、インドネシア人が明確な否定表現を避け、婉曲的な表現を好んで用いる背景には、こういった受動構造、受動認識が絡んでいたと考えれば、合理的な説明が可能となる。

本稿は、筆者がこれまで研究してきた日本語、インドネシア語の対照研究（特に受動態に関する研究）に加筆修正を加え、新たな観点から捉え直したものであり、論拠としてあげた例文には重なっているものもある。なお、本稿掲載のインドネシア語文に関しては、ランブン大学講師の Meiliyana さん、大阪大学大学院生の R. Arini さんにネイティブチェックをしていただいた。記して御礼申し上げる。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
 石原慎太郎、江藤淳 (1991) 『断固「NO (ノー)」と言える日本—戦後日米関係の総括』光文社。
 石原慎太郎、渡部昇一、小川和久 (1990) 『それでも「NO (ノー)」と言える日本—日米間の根本問題』光文社。

19 注 2 参照

20 (r)are は尊敬表現にも用いられており、受動表現との連続性がある。湯浅 (2001) ではこれに着目し、インドネシア語対照の立場から、尊敬表現はスル型の行為に受動的要素を加え婉曲的な柔らかさをプラスし、結果的に丁寧さを醸し出した表現であるとする立場をとる。滝浦 (2008) は、ポライトネスを「距離」という概念で説明しており、筆者もこれに賛同する。ポライトネスを含むインドネシア語対照の包括的研究は今後の課題とするが、本稿で示した「ナル型」表現が、婉曲、ポライトネス、曖昧性へ繋がる根拠を、距離という概念から別稿にて考察したい。

21 「サピア・ウォーフ仮説」という名称は、2 人の著作に見られる 1 つの共通した主張をさして、後の学者が用いるようになった名称であり、現在までのところ、全面的に肯定、否定のいずれの結論にも至っていない (サピア、ウォーフ他：池上嘉彦訳 1970 参照)。この仮説を一言で表現すれば「現実に関する人間の認識や思考は言語に相対的である」という主張である (見城 1994)。

- 大塚高信 (編) (1959) 『新英文法辞典』三省堂.
- 影山太郎 (1998) 『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版.
- 北原保雄他 (編) (1981) 『日本文法事典』有精堂.
- 見城武秀 (1994) 「コミュニケーション論におけるエドワード・サピアの言語論の現代的意味－言語相対性仮説を越えて」『ソシオロギス』18号, 東京大学, pp.121-133.
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の本質』育英書院.
- 佐々木重次 (1982) 「インドネシア語における態の問題」『講座日本語学』10, 明治書院, pp.292-304.
- (1990) 『インドネシア語文法』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所.
- サピア E. ウォーフ B. L.: 池上嘉彦訳 (1970) 『文化人類学と言語学』弘文堂.
- 柴谷方良 (1982) 「ボイス：日本語と英語」『講座日本語学』10, 明治書院.
- 正保勇 (1985) 「日本語とインドネシア語の受動構文」『日本語学』4号, 明治書院, pp.35-46.
- 関昌也 (2004) 「インドネシア語の‘する’動詞・me-形と di-形の並存競合関係について」, 『インドネシア言語と文化』第10号, 日本インドネシア学会, pp.27-49.
- 滝浦真人 (2008) 『ボライトネス入門』研究社.
- 竹内美智子 (1977) 「助動詞」『岩波講座 日本語 7 文法 II』岩波書店, pp.29-112.
- 土屋信一 (1974) 「れる・られる」松村明編『助詞助動詞詳説』学燈社.
- 寺村秀夫 (1976) 「ナル表現とスル表現」『寺村秀夫論文集 II』(1998) くろしお出版, pp.213-232.
- (1982) 「対照言語学と日本語研究」『寺村秀夫論文集 II』(1998) くろしお出版, pp.127-138.
- 仁田義雄 (1981) 「態 (ヴォイス)」北原保雄他編『日本文法事典』有精堂, pp.110-114.
- (1995) 「ヴォイス的表現と自己制御性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, p.31-57.
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
- 林博司 (1993) 「“Affectedness” について－その問題点と展望」『日本語・日本文化研究』, 3号, pp.49-66.
- バタオネドミニスク, 近藤由美 (1990) 『バタオネのインドネシア語講座初級』めこん.
- 松岡邦夫 (1990) 『インドネシア語文法研究』大学書林.
- (1995) 「インドネシア語の従来の受動態とその問題点」『インドネシア言語と文化』1号, pp.97-105.
- 盛田昭夫, 石原慎太郎 (1989) 『「NO」と言える日本－新日米関係の方策－』光文社.
- 森村蕃 (1981) 『基礎インドネシア語』大学書林.
- (1988) 『インドネシア語購読・会話』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (1992) 「インドネシア語に見られる間接受動的表現」『大阪外国語大学論集』8, pp.19-30.
- (1995) 「インドネシア語の受動態形式に関する一考察」『インドネシア言語と文化』1号, pp.85-89.
- (1996) 『インドネシア語』大阪外国語大学出版.
- 安田和彦 (1998) 「インドネシア語のいわゆる「受動」文の類型」『Southern Review』13, 沖縄外国文学会, pp.13-25.
- 湯浅章子 (2000) 「日本語, インドネシア語対照に基づく受動態に関する一考察－第三者の受け身は有標か」『KLS 20』関西言語学会, pp.12-22.
- (2001) 「尊敬表現 ‘(r)are-ru’ に関する日本語, インドネシア語対照に基づく一考察－尊敬表現はスル型かナル型か」『日本言語学会第123回大会予稿集』日本言語学会, pp.22-27.
- (2002) 「日本語, インドネシア語における態と他動性」神戸大学博士論文.
- (2004) 「‘Volitionality’ と ‘Responsibility’－インドネシア語における3種の受動表現 ‘di-’ ‘ter-’ ‘ke-an-’」『甲南女子大学研究紀要, 文学・文化編』40号, 甲南女子大学.
- (2006) 「日本語, インドネシア語のナル型受動構文－受動表現にみる「世界」と「世間」」『シリーズ言語対照：言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版 pp.105-128.
- 吉田金彦 (1971) 「自発の助動詞「ゆ」「らゆ」「らる」」松村明編 1971 所収.
- ルシアナワティ (1998) 「インドネシア語における種々の受け身構文について」『STUDIUM』大阪外国語大学大学院院生協議会, pp.91-109.
- Departemen Pendidikan Nasional (2001) *Kamus Besar Bahasa Indonesia* [KBBI]. Balai Pustaka. Indonesia.
- Gorys K. (1980) *Tata Bahasa Indonesia*. Nusa Inda. Indonesia.
- Hopper P. J. & Thompson S. A. (1980) “Transitivity in Grammar and Discourse” *Language* 56. Warely Press. U.S.A.
- Sitindan G. (1984) *Pengantar Linguistik dan Tata Bahasa*. Pustaka Prima. Indonesia.